



一池莉の作品世界について一

赤柴 展子

池莉が描く小説は、すべて結婚生活、家庭問題に関するものだ。その作品の中には、政治的な思想や、精神論などという重苦しいものはでてこない。彼女の描く世界は、彼女を取り巻く環境からくるものであろうし、彼女自身の体験や考えにより創られているのだろう。

例えば、「少婦的沙滩」（訳題「若妻の沙州」、所載『煩惱人生』作家出版社1989年）の中に描かれる主人公の生活や、その友人を含めた女性たちの考え方は、日本における同年代の一般家庭生活や考えと全く同じである。嫁姑関係、それに対する夫と妻の関係など、全く世界共通であり、文化習慣、考え方の違いなどを、遥かに越えて読者に共感を与えるだろう。

その作品を読んでいくうちに「登場人物の中に自分自身を見つけだしてしまう」それこそが、池莉の作品の一番の魅力ではないだろうか。

中国においても、日本においても、小説は大学の研究機関や、ごく一部の研究者のためのものではないのではないだろうか。一般的でかつ、社会の大部分を占める大衆のものだと思う。その大衆が興味を抱くテーマを持つ小説が、やはり多くの支持を受けることができるのではないだろうか。

私は現在、中国語の語学学校の事務局という仕事をしているが、午前、午後のクラスは大多数、家庭の主婦という人達で構成されている。もちろん、その学費は、何らかのパートタイムの仕事で得た、自ら稼いだお金によって支払われている場合がほとんどだ。彼女達の立場と、池莉が描く夜学に通う主人公の立場と、いったいどれくらいの違いがあるというのだろうか。私を含め彼女達の関心は、常に、子供や、夫や、その他の家族についてであり、自分自身の人生についてである。

湾岸戦争の結果や、社会主義体制の変化などの出来事は、知識としての関心にすぎず、皮膚感覚に迫る出来事ではない。つまり新聞を読んでいく際も、経済欄や政治欄よりも、家庭欄の中の、『人生相談』のコーナーにより強く興味を引かれたりする。

その中に出て来る、嫁姑問題、夫や、自分自身の恋愛問題、子供の教育相談等々、あらゆる問題を読むにつけ、現在の自分自身と比較し、検討を加える。その上で、自分の生活を、人生を再認識しようとする。

池莉の描く小説に魅力を感じるのは、この『人生相談』を読む楽しみに似ていると思われる。特別な知識人でもなく、高級幹部でもない「老百姓」が繰り広げる日常の出来事。その中には、作者の読者へ投げ掛けるテーマも特になければ、結論といったものもないように思われる。だからこそ、読者は登場人物の身に我身をおきかえたりできるし、自分自身と比較したりできるのではないだろうか。

ただ、池莉の作品に描かれている日常生活の出来事より、現実の私達の周りで繰り広げられる出来事の方が、刺激と変化に富んでいるような気がする。それは、池莉自身が、まだ三十二、三才の若さであるということと、関係してくるのではないだろうか。その年齢から推測してみても、彼女の家庭人としての年月は、やはり十年前後だと思われる。十年の歳月の中で、起こり得る出来事は、やはり、二十年、三十年の歳月の中で、起こることに比べれば、厚みや多様さに欠けていくのは当然のことであろう。創作の部分が、大部分であったとしても、やはりこういったテーマを描き続けるとしたならば、その年月は、大きく影響を与えるのではないだろうか。

私個人の意見としては、『人生相談』を毎日読む楽しみが続くように、池莉という女流作家に、あくまでも、家庭問題に代表される日常を描き続けてもらいたい。そして彼女の年齢が増すごとに、いろいろなパターンの事例を読者の前に提示してってもらいたい。そうして、私達に、国家、文化の違いを越え、現在の自分と比較、検討を出来る楽しみを与えてもらいたいものである。



作協90年度、91年度上半期会員拡大

■作協書記処が1990年3月、9月に発表した会員拡大数は、それぞれ191人、300人で合計491人（春の拡大数を秋には192人と報道）。春秋二回行われることとなったが、春季には田中禾、張莉莉、秋期には蘇童、葉兆言、池莉らが含まれている。秋期は ①35歳以下 ②“基層”生活が長く、創作実績があり、かつ文学の発展に寄与した人、をとくに重視したという。■また、91年4月に発表された、同年上半期の拡大は250人。劉夢琳（19歳）韓曉征（北大生）らとともに北京の18歳の任寰が入会を認められた。処女作は10歳。 （釜屋）